

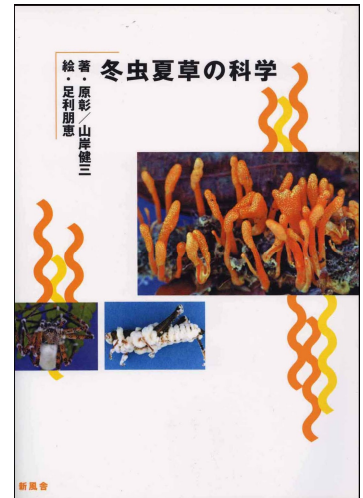
きのこ・かび 関連図書の紹介

吹春 俊光

「冬虫夏草の科学」

著者：原彰・山岸健三／絵：足利朋恵，出版社：新風舎，2007年4月25日発行，A5版，185頁，ISBN：978-4-289-01684-6，1680円（税込）

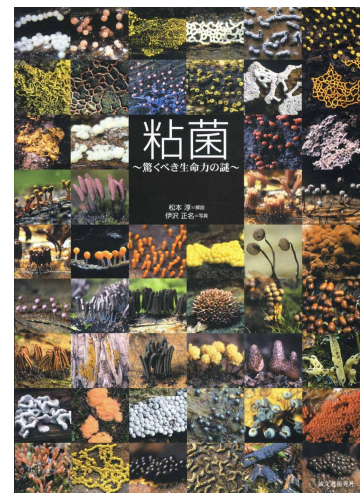
冬虫夏草をタイトルに含む本は世の中に多い。そして「驚異の天然・・・」「末期ガン完全消滅の・・・」「そこが知りたい・・・」など、出版社の“ある種の意図”が強く反映されているだろうと思われるタイトルが並ぶ。しかし本書は異なる。たとえば第5章、冬虫夏草がなぜ昆虫に感染できるかという問いのもとに、昆虫の免疫系のタンパクを攪乱させる効果があるとおもわれる化学物質“ジピコリン酸”を獲得したことを明らかにする経緯が紹介されている。あわせて、冬虫夏草菌のグループが植物病原菌、線虫寄生菌を経て進化し、その過程でこの物質を獲得したらしいことなども論じてある。つまり各章は生物学の正攻法のテーマで書かれているのである。巻末には、著者らの研究グループが著した論文のリストとそれぞれの研究のねらいまで書いてあり、著者らの冬虫夏草への取り組みの、まじめな姿勢がよくわかる。



「粘菌-驚くべき生命力の謎」

著者：松本淳／写真：伊沢正名，出版社：誠文堂新光社，2007年4月30日発行，本のサイズ：29.6×20.8 cm，143頁，ISBN：978-4-416-20711-6，3675円（税込）

変形菌を紹介するムック本としては、非常によくできている。粘菌（変形菌）が何者かを、大きく美しい写真にそって勉強できるしくみとなっている。アナザーワールドとしての変形菌を机上で体験できる。よくできているので、ここでは意見をひとつ。目の前の変形菌の名前を知ろうとして図鑑をめくる。「図説日本の変形菌」（山本幸憲著、東洋書林、1998年、18000円）、「日本産変形菌原色図譜、江本義数著、産業図書、1977年、50000円」をひもとく人は、やはり少ないだろう。



また両者とも熟練者向けである。やはり図書館で見つかる可能性の高い「森の魔術師たち」(萩原博光著／伊沢正名写真、朝日新聞社、1983年、1600円)、「日本変形菌類図鑑」(萩原博光・山本幸憲著、平凡社、1995年、3800円)を手にとるだろう。しかし、ここに紹介したムック本を含むこの身近な3冊は、様々な生態の図や変形菌の成熟段階の紹介図に貴重なカラー頁がついやされ、図鑑の部分の図版の数が削られている。大変にもったいない。変形体の色々や子実体形成過程の写真もよいのだが、図鑑では必要ない。特に古い2冊の方は図鑑としての写真を最優先してほしい、と思ってしまうのである。3冊とも同じような写真の繰り返しとなり、総天然色写真で紹介する全種本を望むものにとっては、3冊の差異が、あまりみられないのである。今回の本は、ムック本としては、このようなつくりがベストであるという判断は正しくて、また、今回の本の紹介で、このような文句を述べるのは、お門違いで申しわけないのだが、シロウトの私が望むのは、既存の写真の範囲で企画を片づけるのではなく、写真の質はある程度落ちてでもよいので、例えば、変形菌研究会会員撮影による正確な同定写真を使用した、日本産の全ての変形菌が、写真図版と線画で検索できる、網羅的な図鑑である。是非つくってください。

「都会のキノコ図鑑」

著者：都会のキノコ図鑑刊行委員会／監修：大舘一夫・長谷川明、出版社：八坂書房、2007年5月25日発行、B6版、258頁、ISBN：978-4-89694-891-2、2100円（税込）

「キノコに出会うために、なにも遠くの野山にでかけることはない、街にもキノコはすんでいる」と監修者は冒頭で述べている。本書は監修者大舘一夫による「都会のキノコ」の図鑑拡大編であり、東京を中心とした都会のきのこが数多くの写真とともに紹介されている。東京都中央区で撮影された熱帯性のアミヒカリタケ、東京都で採れたマイタケの写真にはじまり、めずらしいところでは世界的には珍菌だが関東では普通種のウラムラサキシメジ、誤解の多いツチスギタケ、ウメウスフジフウセンタケ、ケヤキの周囲に出る未知種ケヤキハルシメジ（仮）、タマノリイグチ、キツネノヤリタケ、私はよく知らないモチゲチチタケ（仮）やベニウスタケ等々、類書ではなかなか見ることのできない写真もある。カゴタケの匂いは果実臭であり芳香であると明快に書いてある点、ス

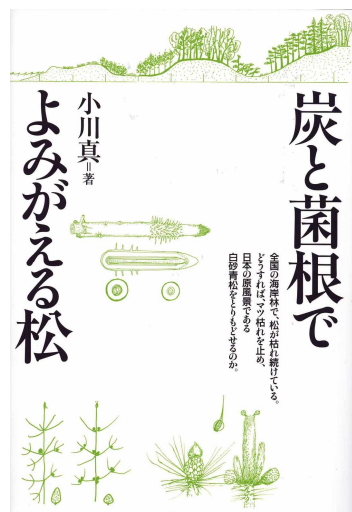


ッポンタケの菌糸束を写真に撮って掲載するように、こだわりのある点、なども好感がもてる。ところどころに挿入された編集メンバーによるきのか随筆も味わい深い。監修者が主宰するきのこの会の、和気藹々とした、よいところが、よく出ている本となっていると思います。

「炭と菌根でよみがえる松」

著者：小川真，出版社：築地書館，2007年7月4日発行，四六判，344頁，ISBN978-4-8067-1347-0，2940円（税込）

小川真は戦前にツチアケビの菌根がナラタケであることを解明した濱田稔の弟子である。同じ研究室の同世代には次に紹介する本の監修者相良直彦がいる。この3名ともに、今となっては世界的な業績で知られる日本を代表する菌学者である。小川真はマツタケの研究で知られ、その後、外生菌根、アーバスキュラー菌根の分野で活躍し、数々の世界的な賞を受賞している。東南アジアでの熱帯雨林の再生に外生菌根菌が必須・有効であることも、実践的な植林活動を通して明らかにしている。森林の外生菌根菌の活性化に木炭を土中に埋めることが有効であること、木炭を土中にもどせば二酸化炭素の固定につながること、それは地球温暖化対策に有効であること、さらには木炭産業が第三世界の重要な産業になりうること、等々に、いち早く気づいたのである。1980年代から小川真は水戸黄門のように全国をマツ林再生のために行脚し、日本で進行する松枯れ現象に、木炭と外生菌根菌を活用する方法を提案し、白砂青松の景観再生に取り組んだ。「白砂青松再生の会」も立ち上げた。その約30年間の、菌根の研究からたどれば50年以上の、活動の集大成が本書である。本書の舞台は皇居、虹の松原、鳥取砂丘、出雲大社、天橋立、等々日本の各地の有名マツ林、そして韓国のマツ林におよび、すべて現場の方々とのマツ林再生活動の実践報告になっている。日本のマツ林研究・再生活動に菌根という視点は大きく欠落しているため、本書の提言は斬新である。情報量が多いが読みやすい。同著者の名著「菌を通して森をみる」（創文、現在絶版）が理論編であるとするならば、それに呼応する実践報告の書である。



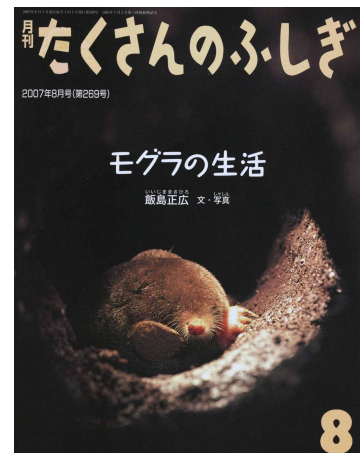
「モグラの生活」 月刊、たくさんのふしぎ（2007年8月号）
（第269号）

著者：飯島正広（写真・文）／監修：相良直彦，出版社：福音館書店，2007年7月7日発行，本のサイズ：25×19cm，40頁，700円（税込）

ヒミズを含むモグラの仲間は日本に7種知られているが、その生活や分布について、今なお不明な部分も多い。しかし相良直彦によりナガエノスギタケが地中のモグラ類の巣のありかを示す有効なマーカーになることが経験的に実証されて以降、続々とモグラ類の巣が発掘されはじめた。加えてモグラ類の分布情報も更新されはじめた。それまで、モグラ類の巣がいったいどんなふうなものであるのか、専門家もよくわからなかったのである。またモグラ類の分布情報等も、稀とされる種ほど、かなり適当だったらしい。なにしろ相手は地下で暮らしており、現在でも不明の部分が多いのである。監修者は、ナガエノスギタケがもたらした豊富な情報から、現在「きのこモグラ学」を提唱している。しかし、ナガエノスギタケがモグラ類の便所からのみ発生することは、もとをたどれば相良直彦と本郷次雄の、ナガエノスギタケとナガエノスギタケダマシを混同・勘違いしたという、ちょっと情けない事情からはじまったのである。始まりはそうであったのだが、その後の相良直彦の執拗な追究力により、ナガエノスギタケダマシが新種として記載され、博物学がお得意の西洋世界においても、誰も気がつかなかった地下生哺乳類とナガエノスギタケの関係等が、どんどん明らかになり、相良直彦は哺乳類学の分野にまで越境していった。相良直彦は誠実で頑固で辛口であり、発表する文章や論文などに極めて厳格・慎重である。本書が、ある菌類のメーリングリストで紹介されたときに、ありがとう、一言もいわず、いきなり訂正文をそのMLにながしている。そのほぼ全文は次のとおり。

《先日、飯島正広著「モグラの生活」を紹介してくださいましたが、間違いがありましたので購入された方は訂正お願いします。<p. 34 の「コウベモグラ」はアズマモグラです>。昨年7月16日NHK総合テレビ「ダーウィンが来た！」で放映された「モグラ びっくり地下生活！」のための取材から生まれた本です。著者はそのときのカメラマンで、5年にわたる取材に私もつきあいました。NHK番組の編集には私は関わりませんでしたから、よくないところがありました（とくにCG）、今回は監修という形ですこし手伝いましたから、まあ良い線まで行っていると思います。上記の間違いが残念でなりませ

ん。相良直彦》。



「新版 北海道きのこ図鑑 [増補版]」

著者：高橋郁雄，出版社：亜璃西社，2007年8月9日発行，A5版，364頁，ISBN 978-4-900541-72-6 C0645，2800円（＋税）

1991年に「北海道きのこ図鑑」として出版された本（当初642種を掲載）が版を重ね、今回増補版全762種となった。良いところ；普通に図鑑には収録されていないような樹病を引き起こす菌、硬質菌なども多数のカラー図版で紹介されている。本州以南の方々にはあまりなじみのない、アカエゾマツやエゾマツ（*Picea*）、トドマツ（*Abies*）等の外生菌根菌が多数紹介されており、見たこともないようなものも多い。そんなものもあるのかと思うのだが、トドマツ型とハイマツ型のマツタケも紹介されている。価格のわりにカラー頁をふんだんに使用した良い図鑑だと思うので、ここではひとつ疑問に思うところを書いておきます。

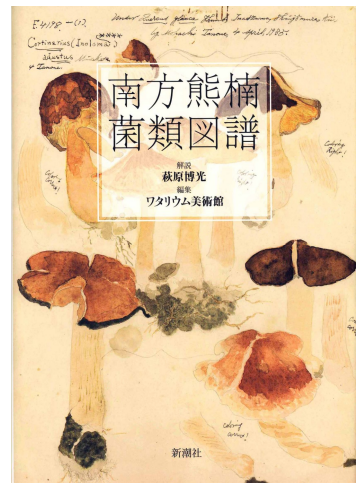
いつも新しい図鑑を見るときにはそうなのだが、私がかろうじて少しわかるワカフサタケ属をめぐってみる。本書ではヒメワカフサタケとアカヒダワカフサタケが紹介されている。しかし前者の写真は、ヒダが真っ白でワカフサタケ属ではなさそうだ。後者の写真はどれも焼け跡で撮影されたような背景となっており、ワカフサタケ属らしいのだが、いまひとつヒダの赤みが少ない。アカヒダワカフサタケは、マツ属の林でも稀に見られるのだが、おもにシイ・カシの照葉樹林とともに、中国中南部、九州から関東平野周辺に分布しており、北海道からの報告はまだ無いはずである。また、アカヒダワカフサタケは動物の死体や糞尿が分解された跡に発生するアンモニア菌であり、この写真にみられるのがもし焼け跡だとしたら、焼け跡からの報告は、たぶんまだ無い（と思う）。ということで、標本が残されていれば、是非検討していただきたい。ちなみに、ワカフサタケ属と北海道といえばモグラ類の便所跡から発生するナガエノスギタケだろう。北海道のきのこ図鑑は数多いが、今井三子により日本新産として北海道ではじめて記載されたナガエノスギタケは、北海道の一般の図鑑に写真とともに掲載されたことがあるだろうか。北海道ではナガエノスギタケが稀であるようだが（相良先生によると、ちゃんとした理由があるらしい）、是非、みつけて掲載してほしいものである。もし見つかったら、正確にその場所をマーキングしておき、できたら相良先生とともに発掘を実施し、発生源も是非調べてほしい。



「南方熊楠 菌類図譜」

解説：萩原博光／編集：ワタリウム美術館，出版社：新潮社，136頁，2007年9月25日発行，ISBN 978-4-10-305551-8，3800円（＋税）

2007年10月から2008年2月にかけて東京のワタリウム美術館というところで、熊楠の展示会が行われた。そのときの図録にあたる図譜集である（たぶん）。本書のほとんどの部分を占めるのが、熊楠による大型菌のスケッチである。きのこの大きさから見て、おそらく熊楠のスケッチのほぼ等倍印刷のようである。印刷の具合も良い。きのこを勉強した方々には、このスケッチの意外性はあまりないのかもしれないが、現代アートのキュレーターの方は、熊楠の画風に仰天されたらしい。熊楠が残した著作などは膨大で、様々なアプローチによる展示会が頻度高く開かれ、評論の書も多い。今や、様々な意味で、あちこちが欠けてしまった現在の我々を、強く引きつける何ものかが熊楠が求めた自然・世界観にはあるのだろう。ちなみに図譜の解説のところどころに「新種」とあるのは、未発表のため、すべて「未知種」と表記すべきではないでしょうか。



「世界のキノコ切手」

著者：飯沢耕太郎／監修：石川博己，出版社：プチグラパブリッシング，183頁，2007年9月28日発行，ISBN 978-4-903267-61-6，1600円（＋税）

うーんこれはすごい。著者は写真評論家なのだが、ふとしたきっかけできのこ切手を集めはじめたのだそうである。意外にも世界にはきのこ切手は結構多い。2005年に私の職場できのこ展をやったときに、キノコの切手も展示した。きのこグッズとあわせると、本展示用のケース以外の小展示ケース10個がグッズと切手で埋まった。秋から始まった展示は、最初は「ワシが採ったきのこをちょっと見てくれんか」という実際的な方々の来館が多かったのだが、きのこの時期を過ぎて年末になると、客層が微妙に変化しはじめた。若いカップルが多いのである。そして、後になってわかったことだが、私が渾身の力をつかった勉強・学習きのこパネル展示などより、きのこグッズ・切手のケースの方が、はるかに強力なオーラを放っていたの



である。きのこ切手、恐るべし。本書は本屋さんには並んでないので、取り寄せ、あるいはアマゾンなどの通販が便利でしょう。好きな人なら買って損無し。

「兵庫のキノコ（のじぎく文庫）」

編著：兵庫きのこ研究会，出版社：神戸新聞総合出版センター，191頁，2007年12月3日発行，ISBN 978-4-343-00428-4，2000円（＋税）

兵庫で出会える245種が掲載されている、と表紙にある。良いところ：末尾に《図鑑にあまり載っていないキノコ》、という特集が組まれており、私は不勉強なのでほんとうに見たことも聞いたこともないような種が合計16種、美麗写真とともに紹介してある。これは良い企画だ。ヨソオイツルタケ、コトヒラシロテングタケ、オオオニテングタケ、スオウシロオニタケなどなど。この頁のためだけにでも買って損はないかもしれない。

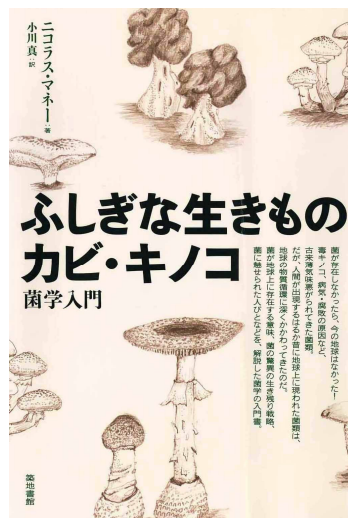


「ふしぎな生きものカビ・キノコ—菌学入門」

著者：ニコラス・マナー／翻訳：小川真，出版社：築地書館，307頁，2007年12月25日発行，ISBN 978-4-8067-1357-9，2800円（＋税）

小川先生が翻訳本を出版されるのは初めてではないか。本の内容は、植物・動物の寄生菌も含めた菌類の生理・生態を、研究者からの研究最前線報告という趣向で、とても興味をそそるように紹介されている。菌の知識が無い人にも、読めばわかるように、非常な工夫と努力がなされている。読みやすい。

私が特に興味をもったのは、菌の紹介のところではなく菌の大先生が紹介されている5章「二人の偉大な変わり者」でした。一人は、A. H. R. Buller ブラー先生。1909年から1934年にかけて Researches on Fungi という6巻（最後の7巻はインデックス）の大著を著した大菌学者。担子器の孢子射出機構について数々の実験をおこない、ブラーズ・ドロップが担子孢子の射出機構に深い関与していることを予言した先生。興味深かったのは先生の私生活や性格が紹介されている部分。ブラー先生は英国から若くしてカナダの当時の田舎町ウイニペグにやってきて、生涯その町で40年間ホテル住まいのまま、



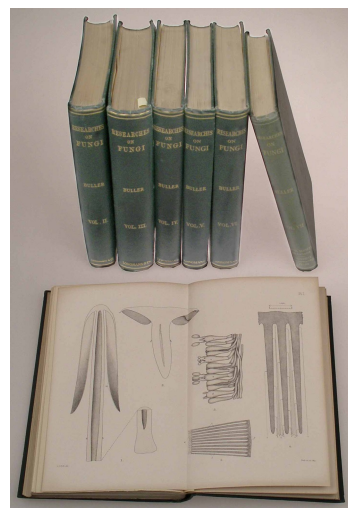
独身で菌学研究にうちこんだ、孤独を好み、かなりの奇人だった。目がよくて、きのこの顕微鏡観察に特に力をいれた。ピアノとビリヤードが上手で、シェークスピアを好んだ、等々の挿話が紹介されている。ブラーズ・ドロップのことや、胞子の射出のことは、幾つかの本や論文を芋づる式に読めば、それなりにわかるのだが、こんなゴシップネタは、どこにも書かれていない。菌学の勉強には、ほとんど関係のない情報なのだが、とても興味深い。小川先生には失礼だろうが、この章を読んだだけでも、私にとっては、本書を手にとった価値があった。そして、紹介されている大先生がもう一人、C.G. Lloyd ロイド先生。この方と、ブラーさんは、親しい菌友であったのだという。ロイドさんが残した Mycological Notes は知っていたが、この人が、かなりの皮肉屋でもあり、また、かなりの社交家さんで、美男の金持ちで、モテモテ男だったのだという。うーん興味深い。本書には、このような菌の教科書には載らない情報も、満載です。

ここに、ブラーさんとロイドさんが残した、偉大な著作と雑誌の写真を紹介しておきます。ブラーさんの本は、非常に読みやすい英語で書かれており、きつと、あまり解像度の高くない顕微鏡で観察したにしては、すばらしい図が多数掲載されている。またロイドさんの、Mycological Notes には、世界から集まった珍しい腹菌や硬質菌が数多く掲載されている。また、雑誌の図版頁には、当時ロイドさんと交流のあった各国の菌学者の写真肖像とコメントが毎号そえられている。めくっていくと、日本人として、宮部金吾（内村鑑三や新渡戸稲造と札幌農学校の2期生で同期、北海道帝国大学教授、日本の菌学の大先達）や仙台の旧制第二高等学校教授であった安田篤の写真が紹介されている。ちょっとうれしい。宮部金吾のところは、直接会って話もしているので、ストレートな紹介になっているのだが、興味深いのは安田先生の紹介のところ。おそらく手紙と標本のやりとりだけで直接会ったこ



PROF. KINGO MIYABE

Mycological Notes に掲載された
宮部金吾の写真 (No.67
vol.7(2), 1922年7月号)



A.H.R. Buller 著, Researches on
Fungi 全7巻(最後の1巻は没後出版された索引)

MYCOLOGICAL NOTES

By C. G. LLOYD CINCINNATI, OHIO
No. 67 (Vol. 7, No. 2) July, 1922

PROFESSOR KINGO MIYABE

One of the most delightful days that I have spent lately was with Professor Miyabe, who stopped off on his way back to Japan. I begged from him, and am glad to present a copy of his photograph.

Professor Miyabe was born in Tokio on April 27, 1860. He studied English in the schools since a boy under American instructors, and speaks and writes English better than most Americans do. He went to college at the Sapporo Agricultural College, and graduated from this institute in 1881, where he received botanical instruction from Professor D. P. Penhallow, an American instructor. Then he went to Tokio University soon after graduation to take a botanical course under Professor R. Yatabe. He was then sent by the Japanese Government to study Cryptogamic botany at Harvard, under Professor Farlow, from 1886 to 1889, when he received from Harvard University the degree of Doctor of Science. On his return to Japan he secured a position of the professor of botany in his Alma Mater, which has grown into the College of Agriculture in the Hokkaido Imperial University, Sapporo, Japan. Many of the prominent mycologists and plant pathologists of Japan have gained their knowledge under Professor Miyabe. Among others, Y. Takahashi, T. Kawakami, G. Yamada, Arata Ideta, G. Hiratsuka, J. Hanzawa, Seiya Ito, T. Miyake, M. Miura, T. Nishida, K. Kabai, T. Hemmi, T. Matsumoto, Y. Lochinai and T. Fukushi.

Professor Miyabe has made three trips to America, and in 1919 also visited the principal institutions of Europe under a commission of the Japanese Government. His last trip was to attend the Conference on Cereal Diseases held at St. Paul and Fargo in the summer of 1921.

The Lloyd Museum has been enriched with a very full set of Japanese fungi collected by Professor Miyabe and others. We have gotten many specimens from other Japanese correspondents, but we have never received from anyone else as full, large and satisfactory collection from Japan as from Professor Miyabe.

Mycological Notes に掲載された宮部金吾の紹介記事 (No.67 vol.7(2), 1922年7月号)

とが無かった安田先生については、意識すると「日本の菌友から送ってくる英語の手紙の正確さは、私にとってミステリーである」《引用した本文の図参照》と、極東の田舎に住む人がどのようにしてこのような英語の能力を身につけたのだろうという風な紹介がされている。

20世紀初頭、極東から大量に標本を送ってきて、しかもかなりの品のある英語とドイツ語を駆使しているのが、米国人から見ると、東洋の謎、かなりの不思議だったのだろう。

この本には前述の2大先生ばかりでなく、おそらく著者が英国の大学で指導をうけた John Webster 先生、孢子分散などの興味深い研究をおこなった Ingold 先生なども登場する。教科書や論文でしか知らなかった大先生の話がきいただけでも、よろこびの本でした。ブラー先生の図ばかりでなく、ウェブスター先生の名著「ウェブスター菌類概論／講談社（現在絶版だが非常に良い本、古本屋で手に入れるべし）」に数多く登場する図もいくつか転載されている。

「日本菌学史」

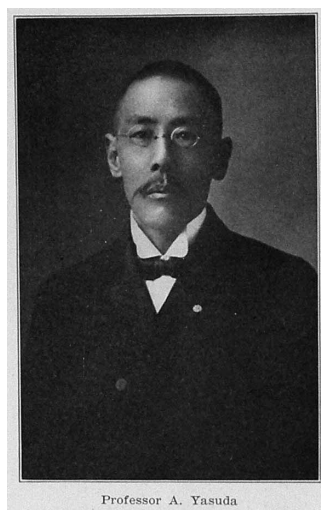
編集代表：宇田川俊一，発行：日本菌学会，111頁，A4版，2006年4月25日発行，2000円

前述の翻訳本で日本の菌学の大先達のことにもふれたので、日本菌学会50周年記念出版物を紹介します。内容は、1) 明治以前の前史を簡略に紹介、2) 明治以降は、学会設立以前／設立以降2005年までに物故された菌学会会員の中から紹介、という構成になっている。前述の、宮部金吾、安田篤先生方についても詳述されており、調べ物をするときに便利である。

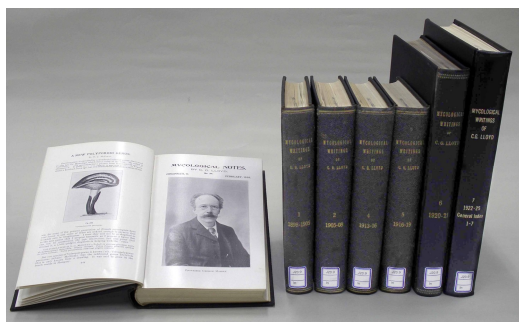
PROFESSOR A. YASUDA

We have presented many photographs of mycological workers in the past but this is the first time we have had the pleasure of reproducing the photograph of one of our Japanese friends. As the readers of Mycological Notes know, Professor Yasuda is a most active student of mycology in Japan, and our museum has been enriched by many rare specimens of his collection. Professor Yasuda is evidently a close student of the subject and we hope will some day issue a systematic work on Japanese fungi. He occupies the position of Professor of Botany in the Botanical Institute of Second Higher School, Sendai, Japan, and has a practical knowledge of both English and German. Indeed it has always been a mystery to me the facility and accuracy with which our Japanese correspondents handle the English. We are the more impressed with it because in our own case we have so much trouble with languages.

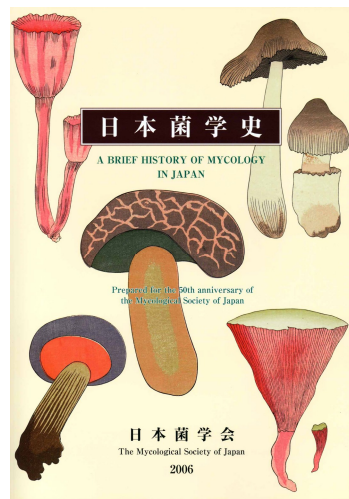
Mycological Notes に掲載された安田篤の紹介記事(No.66 vol.7(1), 1922 年 2 月号)



Mycological Notes に掲載された安田篤の写真(No.66 vol.7(1), 1922 年 2 月号)



Mycological Notes の 1 巻1号(1898 年)から 7 巻 75 号(1925 年)までの合冊(千葉県立中央博物館所蔵)



ここで紹介する本書の表紙は、カラーで紹介できないのが残念だが、岩崎常正（岩崎灌園）による「本草圖譜」の1921年の復刻版（大正版）の図をアレンジしたもの。この大正版は日本のデザイン史に残る、世界に誇る図案集としても見る事ができる。

◆申込先：〒305-8687 茨城県つくば市松の里1 森林総合研究所微生物生態研究室内 日本菌学会事務局 服部力/Fax 029-873-1543

（以上ここまでは「きのこアドバイザー通信」12号と13号に掲載のものを改稿したものです）

「きのこのひみつ」 学研まんがでよくわかるシリーズ27
漫画：ひろゆうこ／構成：橘悠紀，出版社：学習研究社 CB
事業部教材資料制作室，2007年3月25日発行，A5版，128
頁

昔懐かしい学習漫画のきのこ本かと思って読み進めると、主人公の男の子の名前はホクト君だし、ホクト君の叔父さんはホクト（株）の研究員、さらには登場人物が揃ってホクト（株）の工場見学に出かけるというストーリー展開に？？？それもそのはず、学研のCB（コミュニケーションビジネス）事業部とは、数年前まで学研広告宣伝局という名称で、その名の通り企業の出資で広告宣伝色の強い学習漫画本を製作し、公共図書館や小学校図書館に無料配布している部署だったのですね！納得。しかし内容は、楽しい漫画でわかりやすくきのこについて解説されており、豆知識も満載。ホクト（株）さんがもともと包装用資材の会社で、地震で落ちて割れないポリプロピレンのきのこ栽培ビンを作ったことがきっかけで、きのこ栽培を始めたというくだりなど、なかなか興味深く読みました。お子さんやお孫さんにきのこを好きになってもらい、一緒にきのこ狩りをしたい方、おすすめです。非売品ですが、図書館で借りて読むことができます。

（この本の紹介は高橋聡美さんが執筆されました。）

